

## 豊後岡藩の歌人：『春霞集』を通して

高橋, 昌彦

<https://doi.org/10.15017/4741895>

---

出版情報：雅俗. 5, pp.143-155, 1998-01-10. 雅俗の会  
バージョン：  
権利関係：

# 豊後岡藩の歌人

—『春霞集』を通して—

高橋 昌彦

豊後岡藩の文事を語るとき、今まで田能村竹田だけが突出した存在として扱われてきた観がある。絵画の世界なら、それもまた至当なことだろう。しかし、竹田のみが突然、あらゆる分野に秀でた才人として現れるはずもなく、あらためて藩内の環境について考えてみる必要がある作業だと言える。漢学・漢詩文においては、竹田の師である唐橋君山や伊藤鏡河、やや遅れて登場する角田九華など、大きな人物は何人も存在している。そして、それは、和歌の方面においても同じである。だが、本来、地元の文化の高さを積極的に鼓吹するはずの市史は、「岡藩では、国学・歌学の面では雄風や嵩振・竹田など少数精鋭的な状況であった」と、実にあっさりとして記しているのだ。清原雄風は、岡藩を出て江戸で活躍した人物であり、牧嵩振も遺稿集が残っており、この二人については、別に市史もいくらか紙面を割いているのだが、そこではまた「羽倉が、当時、岡藩の江戸屋敷に客分として留まり、家臣の教育にあたっていた」と、わずかながら、和学担当の教育者の存在についてふれている。羽倉とは国学者荷田御風のこと、中川侯の賓師として江戸藩邸に出入りし、そこで亡くなっている。侯は、御風に嗣子のないことを惜しみ、藤井氏の子惟得をして家を嗣がしめ、そのまま藩士とし、荷田家を残したのである。藩主がここまで、力を入れていたのであれば、当然もつと、多くの歌人たちが存在し、足跡を残しているに違いない。そして、確かにそれを裏付ける資料として、明治に入ってから纏められたと思われる『岡藩人歌集』が残っている。だが、残念ながら、今までに紹介されたことを聞かない。やはり、文人竹田のみに目を奪われて、和歌の分野もほとんど手つかずの状態に

あるといつていいのである。本稿では、この竹田と同じ時代を生きた一人の女流歌人の歌集を通して、岡藩の和歌がけつして小数精鋭などと評価されるほど貧弱ではなかったことを見ていきたいと思う。

一

写本『岡藩人歌集』は、現在巻二から巻五までが、大分県立図書館に所蔵されている。巻二見返しに「惣計二百四十二人／歌数三百四十四首」と墨書。藩士は勿論のこと、庄屋などの庶民も含まれている。所収歌には点・評が付してあり、さらに人物についての説明が施されている。編者不詳。この歌集の中で、極めて高い評価を得ている女性がいる。その名は、小河茂子。『和学者総覧』にも『名家伝記資料集成』にも出てこない人物であるが、入集した三首すべてに点がつき、中でも「寄虫恋」には「此人は上手也」と評がある。人物については、

こは、歌を橘千蔭に学ひて上手也。絶す文のゆき通ひして、教をうけしとそ。長歌短歌さま／＼あれと爰に略す。(巻二)

と改めて歌の上手さが述べられている。例えば、巻三に載る田能村竹田を比べてみると、同じく三首採られているが、どの歌にも点・評はついていない。そして、「こは大儒者にて、詩文章をよくし、詩は白楽天、歌は西行上人による、画は世に名高く、人のしる所也」と歌そのものより、以下は画の評価が続いていく。この茂子は、今日ではまったく忘れ去られているが、その娘の秀子は、前掲の伝記集成類にも引かれており、少しは知られているようだ。『岡藩人歌集』では、茂子の次に登場、三首採られており(うち、二首に点がつく)、

こは、幼女にて才智勝れし人也。歌を大江広計に学ひ上手也。寄虫恋の歌は十二才にてよみしとそ。其年はかなく死ければ、母刀自歎きのあまり、橘千蔭に歌をなんみせられしかは、千蔭悲しみ、歌よみて送られしとそ。のち／＼はその名のこごとく、歌も秀らるへくに、惜哉、十二歳にて死けるこそ悲しけれ。

と、その天折を悲しむ言葉が続いている。加藤千蔭の歌は、『うけらが花』二編（文化五年刊）に「豊後小河氏女秀子追悼のことは」（巻七）として出てくる。この歌文については後でふれることにする。

## 二

さて、茂子には『春霞集』という歌集が残る。『岡藩人歌集』の編者も、おそらくは、これを見たのだろう。写本、半紙本一冊。本文墨付十九丁。結び綴じ。書名は、巻頭の歌、

### 立春

久方の天の戸とほく霞つゝ雲路よりこそ春は来にけれ

から採られたものであろうか。これを含め、春歌三十一首・夏歌十八首・秋歌三十三首・冬歌十七首・恋歌二十九首・哀傷歌三首・賀歌四首・長歌十二首、全百四十七首が収められている。附録には、娘秀子の歌とその若い死を悼む歌文が付いている。奥に「明治五年秋七月廿日 藤原一敏写（花押）」と年次と筆写者の名が載り、更に、

この春霞集は、もとの堺県の知事小河一敏翁の祖母のきみの詠藻なるが、先つとし翁が手つからあまた写しとりて、国々の神社のみくらに納められたるが、そのあまれる巻ともを、おのれにおくられし中のひとつ也。かくいふは明治十八年の八月廿四日也。

高山慶孝

面影はそらにそうかふとしあまたはるのかすみのたちへたてても

と、旧所蔵者の識語が続いている。茂子にとっては孫、秀子にとっては甥にあたる小河一敏は、よく知られた勤王の志士である。著書『王政復古義挙録』（明治十九年刊）や『明烏』（明治十三年刊）は維新史の貴重な資料となっている。また、明治十二年から十七年にわたって執筆された随筆『猪首語』『猪鼻語』は、岡藩に関わるさまざまな人物の逸話を伝えてく

れている。その『猪首語』続録<sup>録</sup>中、自らの祖父について、

我祖父弥右衛門一道は、毛利和泉守高標の家士黒木常右衛門実有五男にして、母は京都近衛殿内林元藏の女なり。明和三丙戌年佐伯城下中西邸に誕る。敬五郎と幼名す。安永五丙申、父兄に従ひ江戸定府となりて、江戸愛宕下毛利侯の邸に在り。敬五郎は、曾祖父右衛門一卓の養母林氏の甥の続なれば、智養子にせん事を約し、曾祖父より其よしを岡藩主に願ひ、安永九庚子年四月廿五日聞届られ、此時より一道と実名す。頓て敬五郎は岡へ下り、岡城下上角邸に在て、一卓の女を其妻とす。(以下略)

と書いている。この「一卓の女」が茂子である。禄高は五百石、はじめ御近習物頭、のちに中小姓番頭に進んでいる。一敏は、父総次郎が病身であったため、この祖父母の養子となり、家督を嗣ぐ。つまり、この祖父母の膝下で生長していったわけである。一道の死に、友人古田広計は「稀なりや思ふ心を一すじに世に諂らはずありし人かも」の歌を詠じ、その潔白な氣質を讃えた。一敏のその勤王活動において十四回も幽閉謹慎を命じられながら、己の信念を曲げなかった姿は、まさしくこの祖父の影響であったと言えよう。また、祖母の歌集を数多く写し取った行為そのものは、歌人としての祖母に対する尊敬の表れと言えるかもしれない。一敏自身、和歌をよく詠み、歌集『多太珠廻舎歌集』や修身をわかりやすく歌で説いた『手引草百首』(明治十二年刊)を残している。

### 三

つづいて、『春霞集』中の作品について見ていく。まずは、『岡藩人歌集』にも採られた歌を紹介してみよう。

鶯

はる毎にきゝふるせとも鶯のはつ音はいつもめつらしきかな

物思ひける頃杜宇の鳴を聞て

しのひかねわれもなくへき夕暮にまつ声たつるほととぎすかな

寄虫恋

今はとておもひたえぬる夕暮も心にかゝるさゝかにのいと

「鶯」の歌については、『岡藩人歌集』では「よろしけれどいつもをなほもいふべき所也」との評が付いている。如何なものであろうか。他にも、花や月などを歌題にしたものは多い。対して、詞書に人名が現れる歌は多くない。

大江大人とゝもに田能村孝憲か東国へものしける時よみておくれる

うしといふ旅にはあれと思ふとちかたらひゆかか楽しかるへし

などはその少ない一例である。大江大人は、今まで何度か登場している古田広計のことで、田能村孝憲は竹田である。二人が揃って江戸に向かったのは、享和元年五月のこと、『豊後国志』編纂の最終打ち合わせのためであった。旅中、竹田が描いた「不尽嶺残雪図」に、広計の賛が残る。<sup>注</sup>途次、大坂では木村兼叟堂を、大津では紀梅亭を訪うなど、楽しい羈旅であったようだ。

古田は、岡藩で代々家老を勤める家で、古田織部の裔という。広計は、通称中務、字は弘卿、不染齋・淵黙齋などと号した。宝暦七年三月十三日に生まれ、家老として千石を禄した。享年七十六歳というから、天保三年に没したことになる。<sup>注</sup>

『追加猪首語』には、

：岡藩の典故に委しきは、稀なる人にして、歌道にも長じ、江戸なる加藤千蔭村田春海にも応答をなしたり。（中略）

百姓一揆の事起り、崇山君御隠居とならせらるゝに至り、此頃平右衛門と中務のみ老職中にて御勝手掛なれば、中務は、我々も横山にまかせし責は遁れ難からんと云ければ、平右衛門は、己も其罪有中に卷込れんかと懼れ、其罪を中務独に担はせ、当中務其権を専らになし居たりとて、隠居させたり。（中略）一敏幼年の時、度々面会せしに、真率にして無我なるさまは、今猶しのばれたり。

と描かれている。文化八年の百姓一揆で、財政改革を任されていた横山甚助だけを悪者にして、自らの責を逃れようとした

中川（田近）平右衛門によつて、退隠させられたというのだ。崇山君は十二代中川久貴で、その隠居は文化十二年になる。広計は、この時代の岡藩において、政治的には無論だが、学芸面でも大きな存在であった。荷田惟得の著『菊着綿考』は、広計の要請で書かれたものであり、同じく惟得「人のうたを私にしなごためするをいなむ辞」にも、同人の奥書が残っている。国元と江戸を繋いでいたのが、この人物であったと言えるだろう。また、当時の岡藩における詩社の活動を伝える『由学館甲子詩稿』は、温故堂古田広計旧蔵に係るとい<sup>註</sup>う。更に、碩田叢史の中には、広計の写本や古田家の蔵書から筆写されたものが含まれており、地元のためにも、もっと採り上げられていい人物と思われる。著書に『不染斎歌集』がある。

#### 四

岡藩に限らず、学問・芸術が花開くためには、藩主の嗜好が、大きな要素を占めると言える。田能村竹田一人の活動を見ると、岡藩の場合、文化から天保期にその頂点があるように見えてしまうが、優れた人材の登用・学問所の整備などは、すべてその前の世代に行われたことであつた。その最も大きな実績が、唐橋君山を中心とした『豊後国志』の編纂事業である。岡藩における学芸の最盛期は、十代中川久貞から十一代久持の時期にあつたと言えるのである。その時期は、竹田が多くの師と呼べる人々に囲まれ、育まれた季節であつた。

『春霞集』には、その久持侯の死を悲しむ長歌が詠まれている。寛政十年九月十八日、享年二十三であつた。

寛政十年九月守の殿のかくれ給ひけるをかなしみ奉りてよみ侍る

直入なる 稲はの川の とこなめの いやとこしへに 春はなの さかえまさむと 久方の 月日の如く 大ふねの  
おもひたのみて あちむらの むれある人も 君か代は 八百よろす代と 祝ひつゝ 有けるものを しゝくしろ よ  
みのさかひに かしのみの 独たゝして 冬枯る あら野の末に 何しかも かくれましけむ いはむすへ せむすへ  
をなみ 朝よひに なれつかへてし 人皆は 夢心地して 烏羽玉の よるひるしらす しらまゆみ よるかたをなみ

君かいにし のへに出つゝ あしたには 露とけまとひ ゆふへには 霧にこもりて 村肝の 心をいたみ おほしく 歎かふみれば われしかなしも

### 反歌

直入なる稲はの川の川水の行てかへらぬ君をしそおもふ

そして、母親茂子にとつての大きな悲しみは、愛する娘たちを亡くしたことであった。歌集には、宣子・秀子・熊子の三人の名が登場。中でも秀子は、その歌才から、将来を楽しみにしていただけに嘆きも大きかった。

### 師走十日あまりこゝぬかの日秀子のみまかりける時

いつの代に わすれむものか 月の夜も 花のあしたも ともに見て 歌よみかはし 遊ひつゝ 在へしものを 呉竹の 千代よろす代と たのめりし かひもなくして めくし子に おくらされつゝ 老鶴の 音にのみなきて こふれとも 行方もしらす 独のみ 空しきそらを はふつたの なかめしをれば 冬かれの 梢まはらに 月かけは くまなくてなと かきくらす 心のやみは はるゝ間もなし

### 反歌

春の花秋のもみちもつれくゝとひとり見むとはおもはさりしを

さきたゝぬ身をうらみつゝ現ともゆめともしらす世をや経なまし

同じ瀬にはかなくならてうたかたの今歳ほとゝ消のこるらむ

文化二年十二月十九日のこの悲しみは、歌とともに、そのまま茂子周辺の人々にも伝播していった。そして、先にも述べたように、『春霞集』に、附録として秀子の歌が纏められることになる。その経緯を、秀子の師である古田広計は、

藤原秀子はおのかをしへ子にて、うたよみものかきしことは、其おくつきにしるし置ぬ。こはつねによめる歌の手習のやうに書捨たるか、残りたるをものゝうちより、おほく見出るまゝに、ちりほひうせむもさすかにて、書集みれば三十首に余れるを、その故由おのれにもせよと、茂子のもとめによりて、聊記し置になむ。文化七年の七月 大江広計



「割注 もと卅一首の中につきて／今十首をしるす」  
と、冒頭で述べる。歌は、割注にあるように全部で十首。

夕立

浮雲のあなたは晴て三日の月夕たつ雨そあやしかりける

六月祓

心さへすゝしく成ぬ風そよくならの小川にみそきしつれは

萩

のへことにみたれて見ゆる秋萩の花は鹿こそふみしたくらめ

月前鹿

長月の有明の月に棹鹿のつまよふならばかなしかりけり

八月十五夜曇ければ

花ちらす春の風より秋のよの月にかゝれる雲そつれなき

岡紅葉

ふく風になひく岡への霧間よりほのかに見ゆる薄もみちかな

残菊

見し秋の色ものこらぬ我宿のまかきに匂ふしらきくのはな

待恋

聞なれし鐘の音ながら契置て人まつ宵はおとろかれつゝ

聞恋

人伝にきけるたよりは見るよりもいやまさりぬる思ひなりけり

寄虫恋

我恋は艸葉隠れの虫なれや声のみ聞てあふよしのなき

このうち、末の三首が『岡藩人歌集』に採られ、「待恋」「寄虫恋」に点が付いている。古田広計にしてみれば、三十一首の中でも、いい歌を選んだのだろう。十二歳という年齢を考えれば、将来頼もしく感じられたに違いない。その死を惜しむ声が、各地から届いてきた。広計は、

秀子か身まかりけるよしを聞て、遠遠の人々のよみておこせける歌とも、いとおほけれど、悉するすは煩らはしければ、こゝに其ひとつふたつを

と前書きして、二人の歌文を載せている。一人は、茂子の師である加藤千蔭、もう一人は清原雄風である。千蔭のは、先に述べたように、「豊後小河氏女秀子追悼のことは」として『うけらが花』二編にも収められている。この他にも、千蔭と岡藩の人物との交友は、同書中に数多く拾うことができる。文は、敬語表現や用字など、若干の異同は見受けられるが、内容の違いはない。ここでは、『春霞集』から引いておく。

豊国の道のしり大江の岡にすめる、小河ぬしのいらつめ秀子は、いはけなかりしより、ひてたるさえありて、ふみ見ること好み、去年なむ十まりふたつに成給へるか、其春よりわか敷島のみちをふみ初てよみ出されつと、其母としより見せ給へるを見るに、はしめよりいとよくとゝのひたれば、およすけ行まゝには、名の如く秀たる歌もよみ出給ひぬへく、いとくたのもしうおもひわたりつるを、おなし年のしはず、もかさをやみて、十日あまりこゝぬかといふに、朝霜のこと消失ぬと聞は、かなしともかなしきかきりなり、ちゝのみはゝそはの心の中、いか計かかなしかるらむ、いとせめては其歌をたに残し置て、名しろともせはやと、母としのおもひ起し給ふは、ことわりならずや、よみ置れたる歌とものをはりに、虫に寄る恋といふを題にて、我恋は草葉隠れの虫なれや声のみ聞てあふよしのなきと、よめるを名残にて空しく成給ふを、思ふに言のはのみ世にのこりて、ふたゝひあふましきさかにや有けむ、かなしき哉、かなしきかな  
枯るゝ野の霜と消てもことのはにほひを世々のかたみとは見む

ことのはの花のほひをしるへにてとめてあひむ道はまよはし

文化三とせといふとしの神無月はかり、橘千蔭なみたをぬくひつゝしるせり

最後の年次は、『うけらが花』にはない。成立が、文化三年十月であったことが新しく知られた。

さて、もう一人の雄風。『猪首語統録』には、岡藩士時代から、出奔後における各地での奇行・逸話が、数多く収められているが、その中に、

…何の年頃よりや、武蔵国葛西郡に在て子弟を教授し、世人の尊崇も篤く、加藤千蔭村田春海の列よりも深く交□せられ、又怜野集を編製し上梓して、世にも行はる。岡藩にても、往年逸脱して藩邸には行得ざりしを免されて、藩主の邸にも出入し、旧藩士とも交際をゆるされたり。

と、晩年には岡藩の旧友たちとの交遊が許されたことが載っている。この奔放な歌人が、江戸に落ち着いたのは、寛政末年頃。『類題怜野集』の刊行は、文化三年になる。『清原雄風歌集』（文政五年刊）には、この秀子を悼む歌文は所収されていない。これまでに紹介されたことはないようである。

ふこの国竹田は、わかもとつ国なるに、一たひ身をはふらかしてより、行方もしらぬ旅の空にのみ、久しく年月を経けるまゝに、そのかみのことをとありきかゝりきとおもひ出るも、其世の事は皆夢とのみなりゆくに、ともすれば恋わたる故郷の夢路は、さすかに現のこゝちせらるゝもあやしかし、たま／＼にはるけき風のたよりあれば、おほかたははかなき事をのみ告来る、中にも小河の家の刀自君、其まな子をつひのすみかにもせられし時のかなしひ歌、其外の人々のをさへ、千里の外まで教おほくつたへ来つるを見侍るは、うつゝとやいはまし、ゆめとやおもひさためまし、さるに刀自君の歌の中に、うつゝともゆめともしらすと、あるを見侍りては、ためし世にいひならせし言葉ともおもほえず、わか身のうへにさへ、かこたれ侍りて、いと／＼かなしくなむ

うつゝあるものとおもはぬ人の世をさらに夢かとたどるはかなさ

くたみ山たつ雨雲のよそにたにぬらす袂をいかにくたさむ

ぬるかうちにといふ古言は、まことにさることゝは、今春おもひしりにてなれ

はじめは故郷豊後竹田を思い出し、後半は、茂子の反歌「さきたゝぬ身をうらみつゝ現ともゆめともしらす世をや経なまし」を引きながら、この世のはかなさが強く語られていく。最後の「ぬるかうちに」とは、『古今和歌集』巻第十六にある壬生忠岑の哀傷歌、

寝るがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をも現とは見ず

を踏まえた感想であろう。

このように、地元においても、今までにまったく触れられなかった歌人小河茂子、その娘秀子を追いかけることで、その交遊の広がりが少なからず見えてくるのである。そして、文化というものは、いつの世もこのような人々によって支えられているのである。

## 五

あらためて最後にもう一度、この本の奥書にこだわってみたい。まずは「明治五年秋七月廿日」という日付である。しばらく、明治に入ってから的小河一敏の伝記を辿ってみる。明治元年五月二十九日に堺県知事となり、大和川の治水など多くの業績を残しながら、同三年八月二十日、突然知事を罷免、謹慎を命じられる。九月二十六日には謹慎が解かれ、翌日宮内大丞に任ぜられるが、明治四年三月二十二日には、不審の事ありとして、その身を鳥取藩邸に預けられる。いわゆる「平田派国事犯事件」と呼ばれるもので、矢野玄道・角田忠行なども同時に捕縛を受けている。罪状は今もって明かではない。或いは、広沢参議暗殺の件とも、開化妨害の徒との讒言があつたとも、一敏の建白癖が災いしたとも言われるが、子忠夫は、ただ憚りがあるので理由は書けないとだけ述べている。位記を奪われ、十二月に親類預となる。これが解かれたのが、翌五

年七月二十七日である。この直前に筆写されたのが、この本ということになる。その後は、修史局などに勤務し、宮内省御用掛を最後に明治十九年一月三十一日に没す。享年七十四であった。

次に、この本の由来を書き残した高山慶孝<sup>註12</sup>について触れておく。慶孝は、泉南中通村里井孝幹の次男として生まれ、後に堺市九間町の高山氏を嗣いだ人物で、明治元年郷学校の教員、次いで乙名役から惣年寄、戸長、区長を勤めている。堺県知事をしていた一敏とは、この頃に交友が生まれたのであろう。明治十五年十二月に区長を辞め、その後は歌人として知られるようになる。明治四十年十一月三日、七十歳で病没。遺稿『苞居歌集』がある。識語の日付の明治十八年には、堺時代の一敏の治績を顕彰するため、大和川堤防上に碑が建てられている（五月二十八日）。この本は、その機会に贈られたものではないかと思われる。

識語によれば、『春霞集』は、多くの神社に奉納されたことになっている。<sup>註13</sup> いったい、どんなことを考えての所為であったか。純粹に歌人としての祖母への想いからなのか、それとも自身の失脚と関係があるのか。まだ、答は見つけられずにいる。あるいは、どこかの神社から、『春霞集』が出てくれば、何等かの書き付けがあるかもしれない。しばらくは、それを待つことにしたい。

### 注

1 『竹田市史』中巻（昭和五十九年・竹田市史刊行会）第七章

2 これらの人物については、今村孝次著『二豊人文志』（昭和十八年・朋文堂）に詳しい。また、それぞれの歌集については、北村清土著『修正増補清原雄風家集』（昭和三十五年・竹田市立図書館）、同編『牧嵩振・矢木信古歌集』（昭和五十一年・奥溪文庫）がある。

3 國學院大学日本文化研究所編、平成二年・汲古書院

- 4 森繁夫編、昭和五十九年・思文閣出版
- 5 原文に句読点はないが、読みの便宜を考えて高橋が付けた。また、旧字体は新字体に改めた。以下の引用部も同じ。
- 6 主な伝記として、小河忠夫著『小河一敏』（大正四年・大分県直入郡教育会）、北村清士編・発行『小河一敏先生年譜』（昭和十一年）、小河國麿編『小河家蔵小河一敏資料目録』（昭和五十三年・「資料小河一敏」刊行会）などがある。また、小河家に残る一敏の資料を随時刊行するとして、『小河一敏写真、資料集（小河家蔵）I 辞令編』（昭和六十一年・小河織衣）が公刊されているが、その後、出版されたものを目にしていない。
- 7 『猪首語・猪鼻語・追加猪首語』（昭和七年、油印本・古庄九陽）より、引用。以下も同じ。
- 8 『大分県先哲叢書 田能村竹田 資料集 絵画篇』（平成四年・大分県教育委員会）所収。
- 9 北村清士著・発行『碑帖』（昭和四十二年）所収、「古田中務広計墓碑」による。
- 10 『荷田全集』七卷（平成二年復刻、名著普及会）所収。
- 11 『由学館甲子詩稿』（大正十一年、油印本・古庄九陽）附記による。
- 12 『堺市史』七卷（昭和四十一年復刻・清文堂出版）
- 13 『昭和54年度大分県郷土資料所在調査目録〔近世史料の部〕第2輯』には、竹田市上角の小河一家に『春霞集』一冊が残ることが載っているが、現在には未詳。